

書くことにつながる力を育む外国語活動の授業づくり

－ 相手意識を持ってかかわる言語活動の工夫を通して －

大崎市立古川第五小学校 小野寺 拓

概 要

昨年度、校内研究として9年間の学びの連続性を考慮した外国語活動の授業づくりに取り組んだ成果と課題を受け、今年度の校内研究では、「かかわり合いを重視しながら、学びの連続性を考えた外国語活動の授業づくり」に取り組んでいる。

本研究は、校内研究の主題を受け、外国語活動において自分の考えや気持ちを伝え合う目的や必要感を持った場面を設定し、相手意識を持ってかかわることができる言語活動を行うことを通し、児童の書くことにつながる力を育む授業づくりを探るものである。

1 主題設定の理由

近年、グローバル化が進むことで、世界の国々の人や文化との交流が生まれ、多種多様な価値観に触れる機会が増えている。そのような中では、自分のよさや可能性を認識し他者を尊重しながら、協働してコミュニケーションを図っていく力が必要となる。これからの国際社会に対応し、相互理解を図りながら世の中を生きるために、外国語教育の充実やかかわり合う力の育成が必要不可欠であると考ええる。

小学校学習指導要領（平成29年3月告示）（以下「新学習指導要領」）で第5学年及び第6学年に新たに教科として加えられる外国語の目標には、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成する」と示されている。また、第3学年及び第4学年にも外国語活動が導入されたことにより、小学校の4年間において、自分の考えや気持ちを伝える基礎的な力を養うことや異文化に対する理解を深めることが大切となってくる。

総則では小学校と中学校の円滑な接続についても明記されている。加えて文部科学省の「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」による調査結果では、外国語活動を経験した中学生の多くが、小学校で「単語や文を読む」「単語や文を書く」ことをもっとしておきたかったと回答している。また、報告書の中では、学年が上がるにつれて、英語の学習意欲が低下することや、小学校での音声中心の学びが中学校での文字学習にうまくつながっていないことなどが指摘されている。本校でも同様に、外国語活動を「楽しい」「分かる」と答えていた児童も、中学校で「読むこと」「書くこと」が加わったことで、意識が変わってしまうという課題がある。それは、小学校外国語活動の授業と中学校英語の授業とを円滑につなげる手立てを行ってこなかったからと考える。一方で、同報告書によると、「先進的な事例では、小学校低学年、中学年から外国語活動に取り組む小学校の状況を見ると、小学校高学年で学習意欲が低下する傾向が見られる例もある。その場合、高学年に「読むこと」及び「書くこと」を系統的に指導する教科型の外国語教育を導入した例では、児童の表現力、理解力が深まるとともに学習意欲の向上が認められる取組もある」との調査報告がなされている。このことから、中学校までを見通した系統的な指導の下、「書くこと」の活動を高学年で取り入れた外国語活動の指導の工夫が必要であると考ええる。

昨年度、校内研究として9年間の学びの連続性を考慮した外国語活動の授業づくりに取り組んだ。全学年で英語に関わる活動や授業実践を行ったり、英語を身近に感じられるような環境整備を行ったりしたことで、児童の英語への興味関心を高めることができた。その中で「書くことにつながる力」に焦点を当て、英語表記に見て触れる活動の工夫を行い、児童のアルファベットに親しむきっかけ

くりや英語をもっと知りたいという気持ちを醸成させることができた。今後は、児童の「書きたい」という思いや「相手に伝えたい」という思いを生み出す、必然性を持った魅力ある言語活動を行うことが重要であると考え。

以上のことから、外国語活動の授業において、相手意識を持ってかかわる言語活動の工夫を行うことで、書くことにつながる力を育成できると考え、本主題を設定した。

2 研究目標

相手意識を持ってかかわる言語活動の工夫を通して、児童の書くことにつながる力を育む外国語活動の在り方を明らかにする。

3 研究仮説

高学年の外国語活動において、次の手立てを講じれば、児童の書くことにつながる力を育むことができるであろう。

- (1) 「書くことにつながる力」を育てる授業展開の工夫
 - ① 「書くことにつながる力」を育てる単元の考案
 - ② 相手意識を持ってかかわることができる必要感や必然性がある言語活動の工夫
 - ③ 「書くこと」についてポイントを示した1単位時間の授業展開の工夫
- (2) 英語で書く意欲を高める小中連携授業の工夫
- (3) 英語に慣れ親しませる「イングリッシュブック」の活用

4 研究の対象と方法

4. 1 研究対象

大崎市立古川第五小学校 第6学年

4. 2 研究方法

- (1) 小学校外国語活動に関する文献研究
- (2) 児童の外国語活動に関する意識調査及びコミュニケーションに関する実態調査と分析
- (3) 「書くことにつながる力」を育てる単元の指導計画、1単位時間の授業展開（言語活動）の作成と活用
- (4) 英語に慣れ親しませる「イングリッシュブック」の活用
- (5) 模擬授業、実践授業を通しての研究仮説の検証
- (6) 研究のまとめと考察

5 研究の概要

5. 1 研究主題及び副題について

5. 1. 1 「書くことにつながる力」について

「書くことにつながる力」とは、音声に十分慣れ親しんだ表現について「文字にするとどうなるのだろう」「英語で書いてみたい」というような気持ちを高め、実際にアルファベットを書いたり、英語の語句や表現を書き写したりすることで、中学校の「書くこと」の活動に滑らかにつながる力と捉える。

新学習指導要領では、小学校高学年に外国語が新設され、新たな領域として「書くこと」が加わった。各言語の目標及び内容等の目標（5）「書くこと」では、「ア 大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする」「イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を

参考に、音声でも十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする」の2つの目標が示されている。

「書く」という行為は、「話す、聞く、読む」という行為よりも、難しさが伴う行為であると言われている。単純な機械的練習では、書くことに抵抗や苦痛を感じる児童が出てきてしまう恐れがある。そのため、児童に「書けるようになりたい」「書きたい」という思いを持たせたり、書くことが必要となる状況を生み出したりする言語活動が重要であると考え。また、そのような思いを持ったとしても、英語を書くことは必ずしも容易ではないことから、少しでも書くことに安心感を持たせる工夫も大切だと考える。そこで、これまでの外国語活動で何度も繰り返し触れて「話すこと」「聞くこと」に十分慣れ親しんできた表現や「読むこと」と関連させた文字を書く活動を行うことで、安心感を与えられるように工夫していきたい。文字が「書けた」という達成感や書いたことを活用した友達とのやり取りによって「伝わった」という喜びを味わわせることで、意欲や知的好奇心の喚起を図りたい。「文字を書きたい、覚えたい」という思いから書いた語句や表現は、児童の言葉として蓄積されるものとする。このような経験を積み重ねることが「書くことにつながる力」に結び付くと捉える。

単元の中でも特に「書くこと」に慣れ親しませるためにふさわしい題材を中心として、学年間のつながり、各学年の単元構成及び1単位時間を系統性を持たせた内容にすることで、「書くことにつながる力」をより育成することができると考える。さらに、小学校と中学校の接続を考え、外国語の学習において滑らかに学びがつながるように、中学校との連携を図った外国語活動の授業を取り入れていきたい。小学校で文字言語に慣れ親しませることで、中学校が目指す書く力の育成へとつなげていきたいと考える。

5. 1. 2「相手意識を持ってかかわる」について

「相手意識を持ってかかわる」とは、相手の伝えようとしていることを理解しようとしたり、自分自身のことや自分の思いについて、相手に理解してもらえるように伝えたりすることと捉えた。

新学習指導要領外国語の目標(3)では、「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」と示されている。コミュニケーションとは、言葉や表情、ジェスチャーなどを使って意思疎通を行うことである。また、一方向的な行為ではなく、双方向に関わり合う行為であり、自分の情報を伝えるだけでなく、相手の思いを理解し、相手を思いやる気持ちも身に付ける必要がある。授業を通し、相手意識を持ってかかわる場面を作り出しながら、相手の立場に立って考え、行動できる児童や、互いのよさに気づき、よりよいコミュニケーションの仕方を見付ける児童を育てていきたい。

これまでの外国語活動の授業を振り返ると、活動のために英語表現に慣れ親しむといった授業が多く、児童はゲームやアクティビティを楽しむものの、相手の様子や反応をそれほど気にすることなく、自分の情報を一方的に伝えるといった様子が見られた。本研究では、互いの思いや考えの伝え合いを楽しむことができる児童を育てたい。相手の様子を見て話し方を工夫したり、相手が思いを持った理由を考えながら話を聞いたりする児童の姿を目指していきたい。活動の中で、共通の体験や思いがあった場合は、相手の思いや考えをより一層深く受け止め、共感的な反応を示しながらかかわろうとする姿が期待できる。一方、自分と異なる考えや新しい考えに触れる機会も大切にしていき、理由を尋ねるようにさせたい。「なぜだろう」と疑問に思うことは相手意識の始まりでもあり、自分と異なる文化や価値観を認める態度の育成に関わる大切な経験と考える。相手と話したり、聞いたりすることで生まれた「興味を持ってくれた」「通じ合えた」という喜びから、「自分の思いを伝えてみたい」という気持ちを高めていく。そこから、書くことにつながる必要感や必然性のある活動を仕掛け、「書いて伝えたい」という意欲を持たせたい。

さらに、相手意識を高めることをねらい、小学校と中学校の関わりのある授業を考えていく。両者にとって普段のペアやグループの人ではないからこそ、相手を強く意識する機会となると考える。話し手が発する英語を注意深く聞いて何とか思いを理解しようとしたり、聞き手の様子を見て伝え方を変えてみようとしたりするといった、相手意識を育てる機会にしたい。

5. 1. 3 「言語活動」について

「言語活動」については、新学習指導要領解説外国語活動・外国語編の中でも、実際に外国語を用いた言語活動を通して慣れ親しませることや、具体的な課題を設定して指導することと示されており、その重要性が述べられている。

単元の系統を考え、言語の使用場面やコミュニケーションを行う目的、相手といった条件を工夫し、英語に慣れ親しませていくことが重要である。言語活動を行う上で、英語表現に出合わせたり、活用させたりする時には、実際の言語使用場面に即して行うことを大切にしていきたい。

また、児童自身の生活や学校生活に結び付けて言語活動を設定していくことが重要なことから、児童自身の体験や実感を伴う活動を行い、様々な思いが込められた児童の主体性を生み出す活動を展開していきたい。単元全体に関わる言語活動を行う時は、導入において、言語活動のゴールを見せることで単元の見通しを持たせ、自分の思いを表現するために何が必要となるのか単元全体を通して意識させ、主体性を持った活動としたい。児童が自分の思いを持って表現したい言葉を使用できるように、教師側で例となる語句や表現を示していくことも大切にしていく。

英語使用の自然な場面で友達とかかわり合いながら、たくさん話したり聞いたりすることで、音声指導から、無理なく文字指導へつながる言語活動を行っていきたい。

5. 2 実態調査

5. 2. 1 調査のねらい

小学校外国語活動における児童の実態を知ること、児童の「書くことにつながる力」を育成する研究の方向性と手立ての有効性を考察する。

5. 2. 2 調査対象

大崎市立古川第五小学校 第6学年 154名

5. 2. 3 調査期日

平成30年6月下旬及び平成30年11月下旬

5. 2. 4 調査の方法及び内容

(1) 調査回数 2回

(2) 調査方法 質問紙法（選択肢式・記述式）

5. 2. 4 調査結果及び分析（1回目）

6月に実施した外国語活動の実態調査の結果は次の通りである。

「他の授業と比べて、外国語活動の授業の時に特に感じたり意識したりすることはありますか（複数回答可）」という設問に対して、「友達とよくかかわろうとしている」「相手が伝えようとしていることを、よく聞こうとしている」と答えた児童が多かった（図1）。続いて、「外国語の授業で、友達とかかわる時に気を付けていることはありますか」という設問に対しては、「笑顔」「うなずき」と答えた児童が多かった（図2）。児童は他の授業と比べて、外国語活動の時には、より相手とかかわろうとしていることが分かった。友達とかかわる喜びを味わうことができる学習活動を行うことで、児童は楽しさを感じながら、主体的に学習に取り組むことができると考える。これまでの外国語活動で児童が意識してきたことを大切にしながら、相手意識を持ってかかわることを更に広げ、深めることが大切であると感じる。

「英語を書く学習で、一番興味があるものとして、一番興味が持てないものを選んで理由を書く」という設問では、一番興味があるものとして「大文字・小文字のアルファベットを何も見ないで

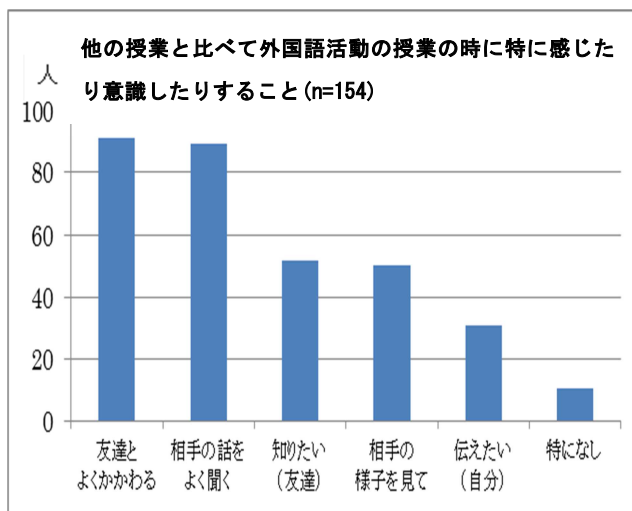


図1 他の授業と外国語活動の授業との意識の比較

書く」ことを選んだ児童が多かった(図3)。理由は「書けるようになると楽しい」「まだ覚えていないから覚えたい」であった。一方で、一番興味が持てないものとして多かったのも「大文字・小文字のアルファベットを何も見ないで書く」であった。理由は、「まだ分からなくて自信がないから」「覚えるのが難しいから」というものもあれば、「もう書けるから」といった、相反する理由が見られた。相反する理由は、他の全ての項目でも見られた。「なぞり」や「書き写し」に関しては、「安心して取り組める」「覚えやすい」という理由から興味が有ると答えている児童もいれば、「なぞりよりも手本を見て書きたい」「なぞるのが苦手」「ただなぞるのがつまらない」という理由から興味を持てないと答える児童が見られた。「選んで書く」については、興味があると答える児童は、「自分の思いを表現できるから」「自由に選んで書くのは楽しそう」という理由を挙げていた。しかし、その反面、興味を持たないと答えた児童は、「伝えることがあまり出てこない時もあるから」「英語を書くのが難しいから」という理由を挙げていた。

今年度より新しく始まった、英語を書くことについては、児童一人一人異なる思いや技能的な実態があることから、児童の多様な実態に配慮して、活動内容やワークシートの様式などを工夫する必要があると感じる。また、書く活動をあまり経験していないにも関わらず、苦手意識を感じていたり、できないという先入観を持っていたりする児童もいるため、書くことに安心感や自信を持って取り組み、児童が書きたくなるような言語活動を設定していきたい。

5. 3. 指導対策

5. 3. 1 「書くことにつながる力」を育てる授業展開の工夫

(1) 「書くことにつながる力」を育てる単元の考案

移行期間の今年度、本校ではこれまでの35時間に加え50時間の外国語活動の授業を設定しており、その15時間は新教材の内容を取り入れることになっている。これまでの「Hi, friends!」の内容に新教材の内容を加え、単元構成を行った。本研究では、その中で特に「書くことにつながる力」を育てるのにふさわしい単元を検討し、可能な限り単元同士に系統性を持たせていく。前の単元で学習した知識や技能を次の単元でも活用できる内容にすることで、安心感を持たせ英語を書くことに慣れ親しませていく。単元間の学習に系統性を持たせることで、学ぶ意欲や喜び、学びの定着を図っていく。

相手意識を持ってかかわることができる言語活動を単元を通して行い、それを基にして、1単位時間の中で行う言語活動を効果的に関わらせながら単元構成を行う。児童が見通しを持ち「書きたい」という思いを持ちながら主体的に学習を進められるように、構成を工夫して指導を行っていく。

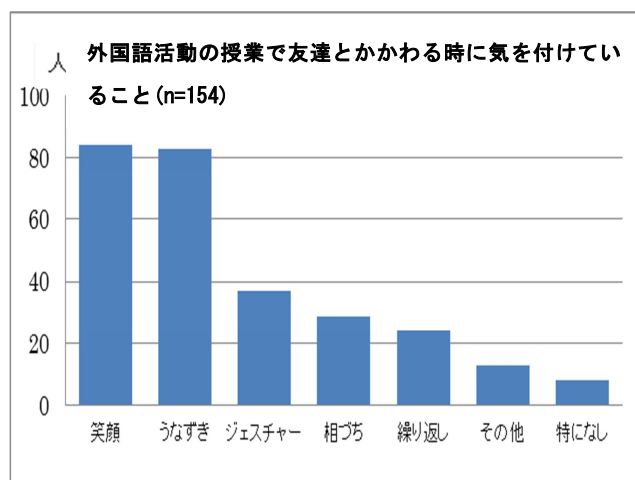


図2 外国語活動と友達とのかかわりに関する意識

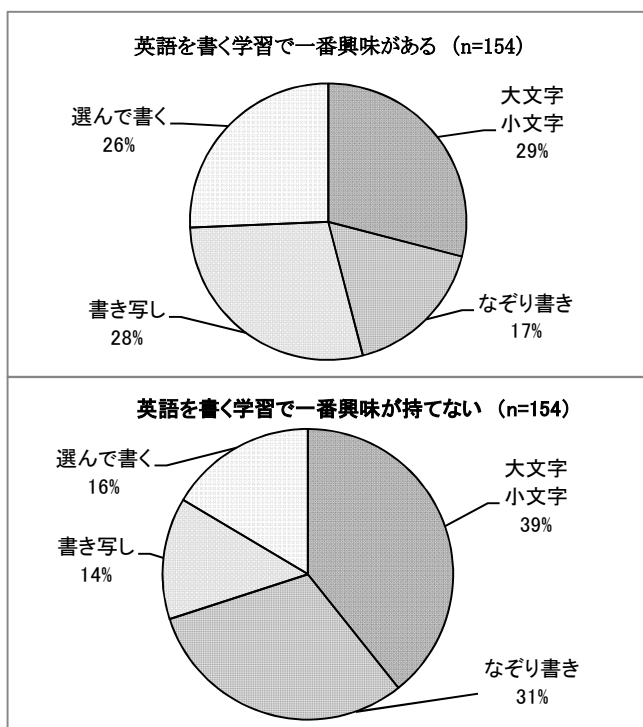


図3 英語を書く学習の意識調査

(2) 相手意識を持ってかかわることができる必要感や必然性がある言語活動の工夫

児童が主体的に学習に取り組む、相手意識を持ってかかわりながら英語を使った学習を行うために、「出会い」「必要感・必然性」「内容」の3つの観点位置付けて言語活動を構想していく(図4)。

「出会い」の観点では、児童の興味関心を喚起させ、学びの主体性へとつなげていくために、単元や授業の初めで行う課題提示の仕方を工夫していくことを大切に考える。この出会いでは、児童の既存の知識や感覚との差に気付かせたり、自分にとって身近なものと捉えることができたりするものを取り上げていく。

「必要感・必然性」の観点では、何のために活動を行うのかといった必要感や英語を使用するための必然性がある目的や使用場面の設定の工夫を大切にしていく。「出会い」で引き出す

ことができた児童の興味関心を生かしながら、英語に触れる活動に結び付けていく。活動の中では、児童が思いを持って選択し、自己決定したものを表現できるように配慮していきたい。

「内容」の観点では、言語活動のゴールをどのようにするかを考える。「学習プリントで発表する」「ポスターを作って掲示する」など表現の形を吟味することや、誰に対して表現するものなのかを明確にする。

3つの観点で考えた「言語活動」を「相手意識」「書くことにつながる力」と有機的に関わらせることで、児童にとって取り組む意義がある活動となる。さらに、このような言語活動を繰り返して行っていくことで、「相手意識」や「書くことにつながる力」をより高められると考える。

(3) 「書くこと」についてのポイントを示した1単位時間の授業の工夫

中学校の「書くこと」につなげるための「書くことにつながる力」は、単元を通して育成することになる。その「書くことにつながる力」を育成するためには、本時の目標を達成させる1単位時間の指導過程を工夫するとともに、単元の目標と言語材料、言語活動を効果的に関わらせる必要がある。その際は、書くことを意識するあまり、単純な作業の繰り返しや過度の負担にならないように配慮しなければならない。児童が意欲を持って書き、次への活動に自信が持てるような取組にするために、書く目的や意図を明確にした活動を設定する必要がある。

① 「書くことにつながる力」を育てることを意識した時間「もじもじタイム」

文字を「書くこと」に苦手意識や難しさを感じている児童にとって、少しでも親しみを持たせたいという考えから、書く活動を「もじもじタイム」と名付けた。「もじもじタイム」では、これまでの学習で十分慣れ親しんできた語句や表現を書かせることで、児童に安心感や意欲を持たせる。さらに、書いたものを活用してアクティビティを行ったり、発表資料として使用したりするとい

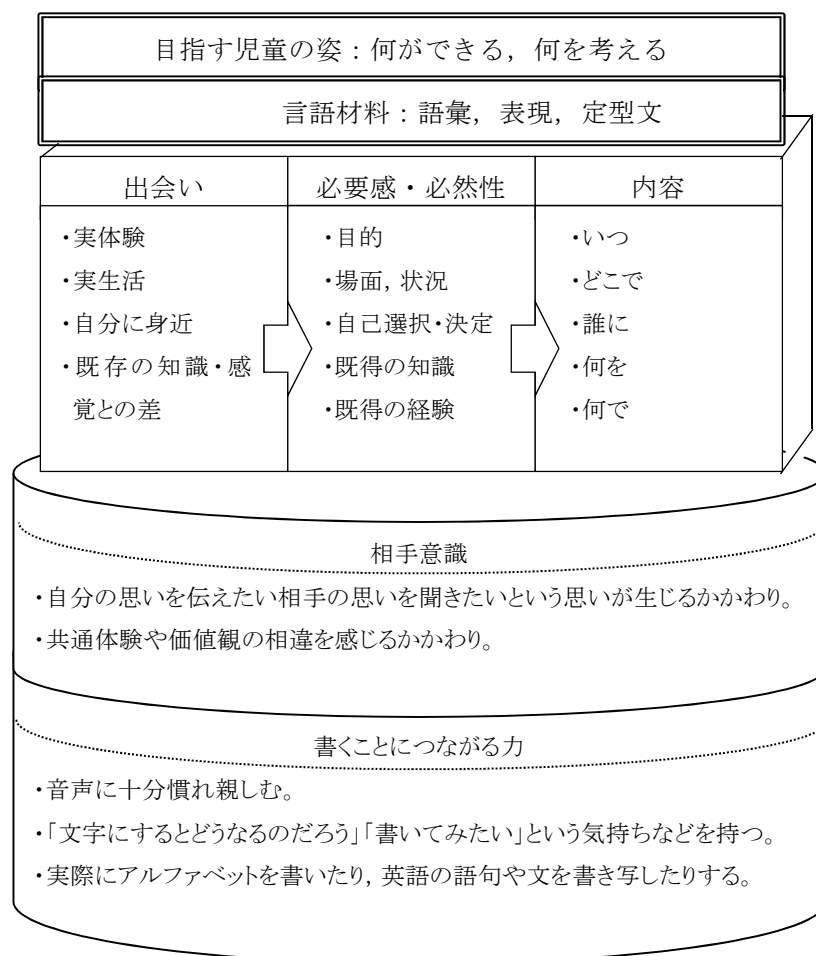


図4 言語活動構想図

ったつながりを持たせることで、児童にとって書く目的や意味がある活動となるようにする。語句や文を書く際は、「自分の気持ちを表現した」という思いを少しでも持てるようにするために、児童自身で言葉を選ぶという経験をさせていく。書いたものが次の活動に生かされる経験をすることで、児童にとって言葉は意味のあるものとなり、自分の中に言葉が蓄積していくことにつながると考える。

② 児童の実態に合わせたワークシートの工夫

文字を書くことに慣れていなかったり、書く前から苦手意識があったりするといった、書く意欲や技術に差がある児童の実態に即して書かせる方法を工夫していく。4線が描いてある範囲やなぞり書きの量が異なるワークシートなどを用意し選ばせることで、児童の主体的な取組を生み出していく。ワークシートは児童の実態を考えながら、本時の目標に照らし合わせて、適宜吟味していく。

5. 3. 2 英語で書く意欲を高める小中連携授業の工夫

新学習指導要領において、小学校第3・4学年ではコミュニケーションの「素地」を養い、小学校第5・6学年では「基礎」を育成することになっている。さらに、中学校第1学年では、小学校第3学年から第6学年における語、句、基本的な表現などの学習内容を繰り返し指導し、定着を図ることが示されており、児童にコミュニケーション能力の「基礎」の確かな定着・向上を目指すことが求められている。そのため、それぞれの校種の教員が見通しを持って、系統的に指導を行う必要があると考える。

本校古川第五小学校と古川南中学校が外国語を通して連携する上で「共有」と「交流」を大切にしていって進めていく。小中連携授業を行うためには、各学校で掲げている卒業までに育成したい児童の姿を具体的なイメージを持って共有しながら、段階を踏んで進めていけるように計画する。校内研究授業の機会を活用し、実際の授業を参観するだけではなく、授業づくりの話合いから、参観後の検討会まで交流していけるように計画する。学校種が異なる教員同士の教育観も含めた理解を共有しながら、小中連携の授業につなげていきたい。

児童と生徒が交流する際は、多様な可能性を見出しながら、協力して進めていく。例えば、児童が直接中学校に足を運び、中学生にインタビューを行う活動を行ったり、場所が離れたところでのICT機器を使用した授業や手紙、成果物で交流したりするなど、継続した取組を行うことができるようにしていく。中学生に答えてもらったインタビューの結果をまとめていく活動で英語を書いたり、英語で書いた成果物を中学生にも見てもらう機会を設定したりすることで、児童に相手意識や目的意識を持たせた活動を行うことができると考える。

5. 3. 3 英語に慣れ親しむ「イングリッシュブック」の活用

児童が、英語を書くことに楽しさを感じて取り組むきっかけとなり、書くことに慣れ親しむことができるようにするために、「イングリッシュブック」を作成する。

作成に当たっては、授業や生活の中で触れた英語の中から、児童が自分で書いておきたいと思った語句や表現を選んで、書き残していくこととした。児童の興味によって書く量を増やすことができるように、ページ数を限定せず、活動に沿って新しくページを増やすことができるようにした。ある程度のカテゴリーに分けてページを構成することで、本としてページをめくる楽しさを持たせたい。例えば図5・6のように、「ABCの順番で大文字・小文字と自分で選んだ言葉を書くページ」「ABCの順番ではなく自分の興味のあるアルファベットを書くページ」「自分の好きな食べ物に関する言葉を集

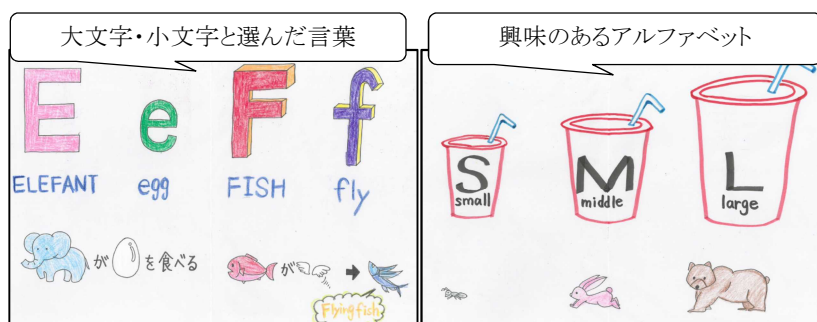


図5 イングリッシュブック「アルファベットのページ」例

めたページ」「夏の思い出を書き留めたページ」のように構成していく。授業で使ったワークシートを貼ったり、文字と共に絵を描いたりしながら、児童本人が楽しみを持って取り組めるような活動にしたい。さらに、英語に関わる本を学校や市の図書館から借りて教室に置き、環境を整えたい。

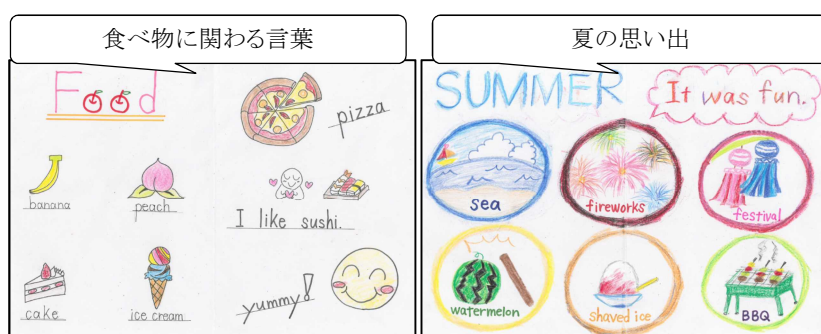


図6 イングリッシュブック「好きなものなどの言葉集めページ」例

年間を通して一冊の本を作り上げることで、アルファベットを覚えたり英語を見て書いたりすることへの自信を高めたいと考える。学びの足跡として学習したことの振り返りもでき、自分の成長への喜びや英語を書くことへの意欲付けを図ることができる活動である。

5. 4 授業実践と報告

5. 4. 1 「書くことにつながる力」を育てる授業展開の工夫について

(1) 「書くことにつながる力」を育てる単元の考察

単元の中でも特に「書くこと」が中心となって言語活動を行うことができる単元として、Unit 4「I like my town.」を選び、これまでの学習と次の単元に系統性を持たせた活動となるように単元構成を考えた。既習事項の like や have, can などを活用しながら授業を進めたことで、児童は「英語が聞き取れる」「英語が言える」という思いを持って楽しみながら活動している様子がうかがえた。町の施設に関する新出語句においても、1単位時間の中でオリジナルチャンツやゲームを取り入れ、音声に充分慣れ親しませることを意識しながら進めた。聞き取ることができたり、話すことができたりする言葉については、児童は文字を書くことに大きな負担を感じていなかった。次の単元の Lesson 4「Turn right.」では、「自分で考えた町を案内」というアクティビティの際に、古川第五小学校の周りをマップ化したワークシートを使用した。児童は前単元で書き慣れた施設名をなぞって書いたり、書き写したりしながら、マップを自由に作って完成させる活動に主体的に取り組んでいた。

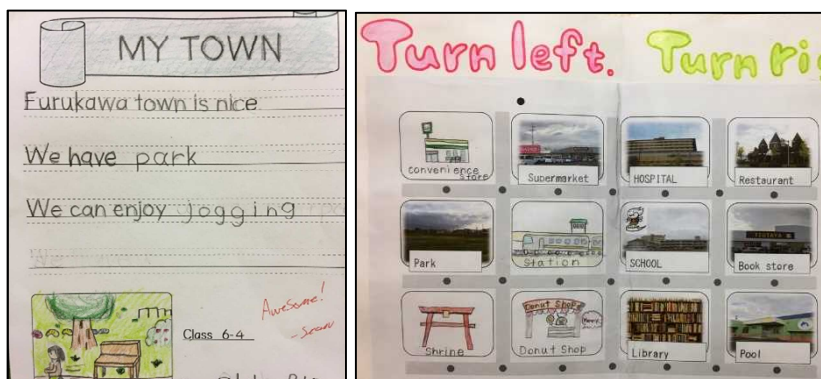


図7 (左) Unit4 (右) Lesson4 で児童が書いたワークシート

児童は「英語が聞き取れる」「英語が言える」という思いを持って楽しみながら活動している様子がうかがえた。町の施設に関する新出語句においても、1単位時間の中でオリジナルチャンツやゲームを取り入れ、音声に充分慣れ親しませることを意識しながら進めた。聞き取ることができたり、話すことができたりする言葉については、児童は文字を書くことに大きな負担を感じていなかった。次の単元の Lesson 4「Turn right.」では、「自分で考えた町を案内」というアクティビティの際に、古川第五小学校の周りをマップ化したワークシートを使用した。児童は前単元で書き慣れた施設名をなぞって書いたり、書き写したりしながら、マップを自由に作って完成させる活動に主体的に取り組んでいた。

(2) 相手意識を持ってかかわることができる必要感や必然性がある言語活動の工夫

Unit 4「I like my town.」では、古川第五小学校の周りの町について、目的が異なる2つの言語活動を行うことで、児童の意欲を継続させながら、段階的に英語表現に慣れ親しむことができるようにした。

1つ目の言語活動の導入では、ALTの友達が登場し「古五小の町を紹介してほしい」と児童にお願いする映像を使用した。ALTの友達に、自分の町のよさを伝えるという目的意識を持たせ、相手意識の高まりを期待して取り組んだが、映像を流すだけでは、児童の「町を紹介したい」という意欲を高めるまでには至らないと感じた。ALTの友達が話している内容を丁寧に扱うことや自分の町のよさを伝えるために、どんな方法があるかを考えさせるなど、子供たちが自ら伝えたいと思う気持ちを高めさせるような、相手意識の持たせ方を考える必要があった。

2つ目の言語活動では、自分たちが考える住みよい町について、中学生の英語の授業に使用するためにポスターを作成するという目的を設定した。紹介する相手を古川南中学校の2年生にしたことで、明確に相手意識を持たせることができた。ポスター作成に当たっては、町にほしい施設が同

じだった児童同士でグループを組ませたことで、互いのアイディアを生かしながら協働で作り上げる喜びを味わわせることができた。授業後の振り返りでは「グループのみんなと何を書くかコミュニケーションを取りながら楽しく活動した」「欲しいものと同じでも、なぜ欲しいのか理由は違うのだなと思った」などの記述から、グループの友達とのかかわりも充実させることができたと考える。

(3) 「書くこと」についてのポイントを示した1単位時間の授業の工夫

第一時のALTの紹介カードの提示を始めとして、授業を行うたびに異なる指導者の紹介カードを掲示した。「もじもじタイム」でそれらを参考にする児童の姿が見られたことから、書く意欲や安心感につながったと感じる。指導者の紹介カードを提示する際には、最初にスピーチだけを聞かせ、その後に紹介カードを示したことで、話し合うように指示を出さなくとも子供たち同士の話し合いが生まれ、音声と文字言語のつながりを意識させることができた。「もじもじタイム」では、書いたことをその後の活動に生かせるように工夫した。書いた物を活用しながらゲームや発表に取り組む児童の様子から、書く目的や意味を感じることに繋がっていたと考える。「自分が伝えたいことが書けるから楽しい」「書いていると外国の人と話したくなる」という感想が聞かれ、自分の気持ちを表現することを大切にしながら言葉を選ぶ経験をさせたことで、児童の満足感につながったと考える。また、「もじもじタイム」では、数種類のワークシートを用意して児童自身に選ばせた。児童全員がワークシートに書くことができたことから、書くことに安心感を持たせるために有効であったと考える。

一方、提示したワークシートに関して、見ただけでは種類の違いについて分かりにくい部分もあったため、黒板に掲示しながら種類の違いについて確認する必要があるがあった。また、書く活動の時間を充分確保する必要があると感じた。書く内容が決まっていた場合でも、書き終わるまで時間がかかる児童や書く内容について準備が足りない児童がいた。45分の授業時間の中で書く活動をどの程度確保するか、実践を重ねて検討していきたい。

5. 4. 2 英語で書く意欲を高める小中連携授業の工夫について

8月に本校と古川南中学校の教員による、小中連携合同教科部会を開いた。外国語科部会においては、小学校の外国語活動について相互に理解を図り、本校として現在取り組んでいることを確認することができた。小学校での学びを理解した上で、中学校の英語の授業の在り方について、小学校から継続して取り組んでいけること、中学校でどうレベルアップしていけばよいかということを考えることができた。また、児童生徒が互いに英語を学ぶ意欲や身に付けさせたい力の向上につながり、継続可能な交流授業の可能性を探っていく重要性について話し合った。

Unit 4 「I like my town.」の第3時において、古川南中学校の教員に授業を参観してもらった。その教員に授業終末で参観した感想を述べてもらうとともに、「仕掛け」として事前に「本時までの学びを生かして理想の町について考えてもらい、それを中学校の授業に使わせてほしい」ということを依頼しておき、児童に伝えてもらった。中学校の教員の話を聞く児童の表情や「やってみよう」という声からも、児童の意欲を高めることができたと考えている。

Unit 5 「My Summer Vacation.」, Lesson5 「Let's go to Italy.」において古川南中学校2年生と本校6年生の交流活動を実施した。児童が中学2年生に英語で伝え、その感想を聞いたり、中学生はどうかについて話してもらったりする活動を行った。児童は話す際にキーワードとなる言葉を書いた紙を見せることで相手に分かりやすく



図8 古川南中学校の英語科教員によるしかけ



図9 6年生と中学2年生の交流活動の様子

なると考え、必要感を持って自分で選んだ語句を英語で書いた。

5. 4. 3 英語に慣れ親しむ「イングリッシュブック」の活用について

1 単元 2, 3 回の頻度で授業終了前の10分程度の時間を使って取り組んだ。その際、学習内容からトピックを提示した後は、児童の思いを尊重して書かせることを大切にしました。英語を書くことに楽しみながら意欲的に取り組む児童の姿が見られた。授業以外にも、時間を見つけて自主的に書く児童も多くいた。

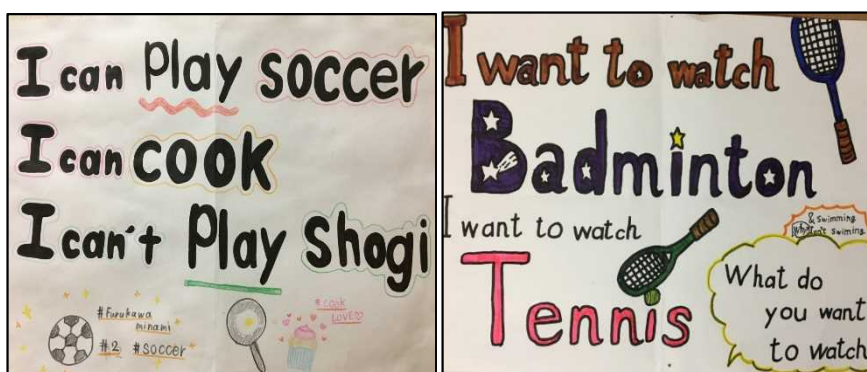


図 10 児童が書いたイングリッシュブックの一例

児童の感想でも、「イングリッシュブックは、それぞれの単元ごとの勉強を振り返ることができるからいいと思う」「勉強したことを自分の考えでまとめて書くことは、とても自由で楽しい」「自分で工夫して書いたり作ったりして楽しく英語が覚えられる」といった、書くことに楽しさを感じている記述が見られた。また、「友達に聞きながらできるから楽しい」「出来上がったものを友達に見せるのが楽しみ」というように、作成を通して、友達とのかかわりが生まれることに喜びを感じている児童もいた。自由に英語を書いたりデザインしたりしながら、学習の成果を書き溜めていく活動が、英語を書くことへの意欲付けを図ることにつながっていると考えられる。

6 研究のまとめ

6. 1 研究の成果

実践授業終了後の11月に2回目の実態調査を行った。まず、選択式の調査では「どんな活動が楽しいですか（複数回答可）」という設問では、「書くこと」を選んだ児童は1回目調査の34人から、55人に増えていた。次に英語を書くことについての自由に記述する調査では、「自分の知っている話すことのできる英語を書くのが好き」「習ったことを話すだけではなく、書くことで覚えられるから楽しい」というように、音声言語に慣れ親しんだ表現を安心して書いている児童の姿が見られた。また「言葉では表しにくいけれど、書いたりイラストを付けたりして自分を紹介することが楽しい」「自分のことを自由に書いて伝えることが楽しい」という記述から、決まった言葉を繰り返し書く練習ではなく、自分の思いを伝えるために書いたことで、書くことを好意的に感じたと分かる。さらに、「形がとてもおもしろいから書いていると楽しい」「難しいけど書けるとうれしいし、自信が付く」など、書く機会があることで、学習意欲の向上につながる児童がいることが分かった。

以上の結果から、相手意識を持ってかかわる言語活動を工夫し、系統性を考えながら、慣れ親しんできた語句や表現を書かせたことは、児童の書きたいという意欲や書く楽しさを引き出し、安心感を持たせ、書くことに慣れ親しませることにつながったと考えられる。

6. 2 今後の課題

今後の課題は、他の単元でも、児童が必要感や必然性を持って英語を書くことができる言語活動を考えていくことである。そのために、伝える相手をどのような相手にするのかということだけではなく、「相手に書いて伝えたい」という思いをどのようにして膨らませ、より高めていくことができるかについて考える必要がある。今回実施した単元についても、児童の「書くことにつながる力」や相手意識を、より育てることができるよう改善していきたい。また、今回の小中連携の取組では、児童の練習成果や作成した作品を中学2年生に直接話したり見てもらったりしたものの、多様な取組とは言い難い面があった。今後は、互いがやり取りを行うことができる題材の設定や ICT の活用を工夫し

ながら、交流の幅や機会を広げ、長く継続できる取組を探っていく必要がある。モデルとして小中連携の取組を行った学級においては、「書くこと」への意欲や慣れ親しみに関して成果があったことから、どの学級でも取り組むことができるかかわり方や活動の方法を探っていきたい。さらに、今年度は、児童が初めて「書くこと」に取り組んでいるという実態から、児童の「書くこと」に関する変容を数値として表すことができなかった。児童の変容については、来年度以降の実践を通して更に分析検証していきたい。

主な参考文献

- | | |
|---|-------------|
| [1] 文部科学省：「小学校学習指導要領」（平成29年告示） | 2017 |
| [2] 文部科学省：「小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編」（平成29年7月） | 2017 |
| [3] 文部科学省：「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告
～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～（平成26年9月26日）」 | * 2014 |
| http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm | |
| [4] 大城賢編：「小学校新学習指導要領 ポイント総整理」 | 東洋館出版社 2017 |
| [5] 萬谷隆一・直山木綿子・卯城祐司・石塚博規・中村香恵子・中村典生：「改定 小中連携
Q&Aと実践」 | 東洋館出版社 2013 |
| [6] 五味太郎：「絵本ABC」 | 岩崎書店 1983 |
| [7] いもとようこ：「ABCのえほん」 | 金の星社 2005 |

図表等の許諾について

図1～図3は、児童の実態調査結果の一覧、図8と図9は、実践授業の中での児童の様子の写真、図7と図10は、実践授業の中で児童が記入したワークシートの一部である。所属校校長と相談の上、「氏名は掲載しない」との条件で資料を活用することとし、児童の保護者にその趣旨を説明した上で許諾を得た。